

2021年8月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北大西洋～中央アジア、東シベリア～北太平洋で波列パターンが卓越し、ロシア西部、東シベリアで正偏差、ヨーロッパ、アリューシャンの南で負偏差となった。また、中央・東アジアの北緯40度帯では帯状に500hPa 高度が負偏差となり、特に日本の西で明瞭だった。200hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流はユーラシア大陸～日本付近で平年と比べて南寄りを流れ、日本の西では南へ蛇行した。ユーラシア大陸北部では寒帯前線ジェット気流が明瞭だった。海面気圧をみると、オホーツク海で正偏差となり、日本の南海上では太平洋高気圧の西への張り出しが平年より強かった。850hPa 気温をみると、北米東部、ロシア西部～東シベリアで高温偏差、東アジア北部、アリューシャンの南で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、スマトラ島の南西～インドネシア付近、メキシコ南西岸で活発、ベンガル湾～フィリピン付近、太平洋赤道域の西部、北太平洋熱帯域の西部で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の前半に南米～インド洋西部を東進したが、その後は不明瞭となった。対流圏上層では、インド北部～中国南部で高気圧性循環偏差、フィリピンの東海上、オーストラリア北西部で低気圧性循環偏差となったほか、太平洋熱帯域の東部では南北半球対の高気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、北インド洋熱帯域で低気圧性循環偏差、南シナ

海～日本の南海上で高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、太平洋熱帯域の広い範囲で正偏差となり、特に南半球側の中部～東部で顕著だった一方、大西洋赤道域では負偏差となった。南方振動指数は+0.9だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.27℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、8月として4番目に高い値となった。8月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.70℃/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

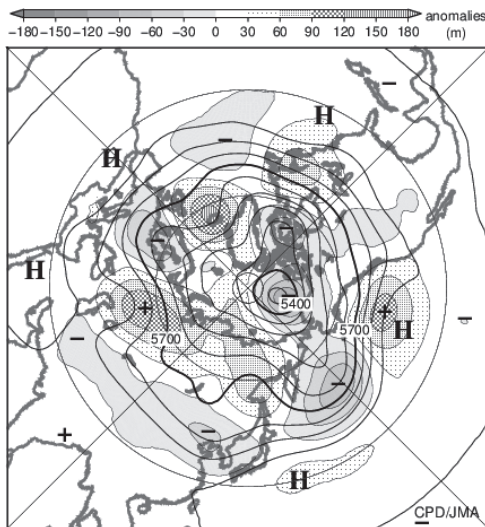
- インドシナ半島及びその周辺、中央アジア南西部～ロシア南西部、ヨーロッパ南部～北アフリカ北部等で異常高温となった。
- 東日本～中国中部、インドネシア中部～西部、ロシア南西部～ヨーロッパ中部、米国中西部～南東部等で異常多雨、インドシナ半島中部及びその周辺、カナダ南東部等で異常少雨となった。

(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

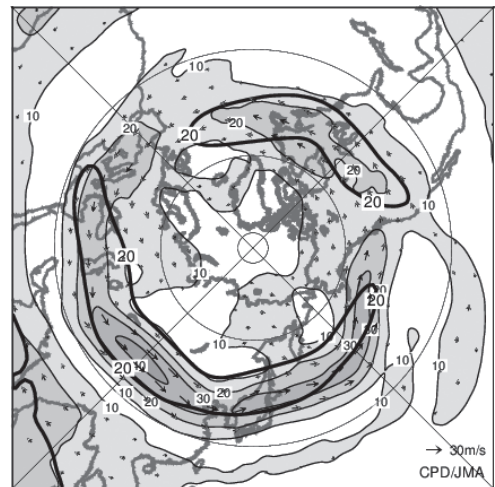
※ 特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

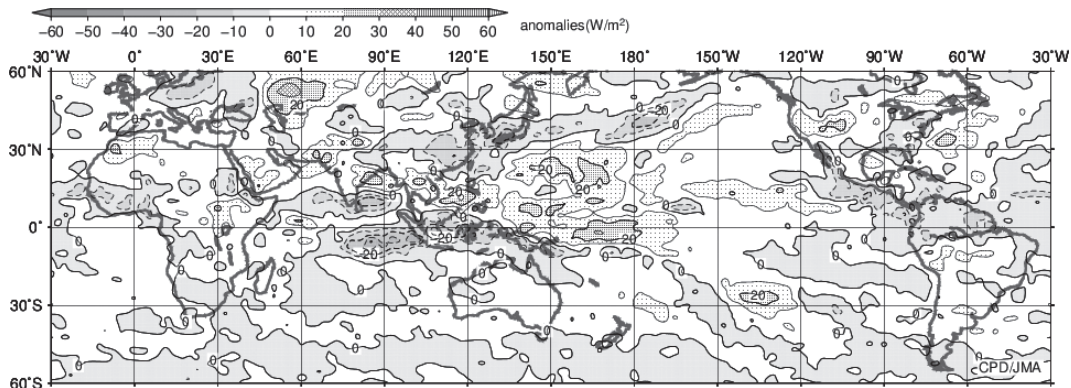
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2021年8月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

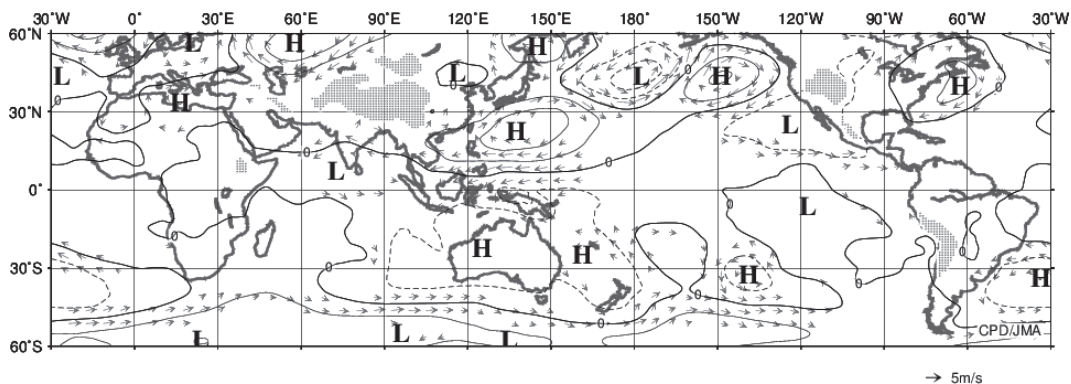


2021年8月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。

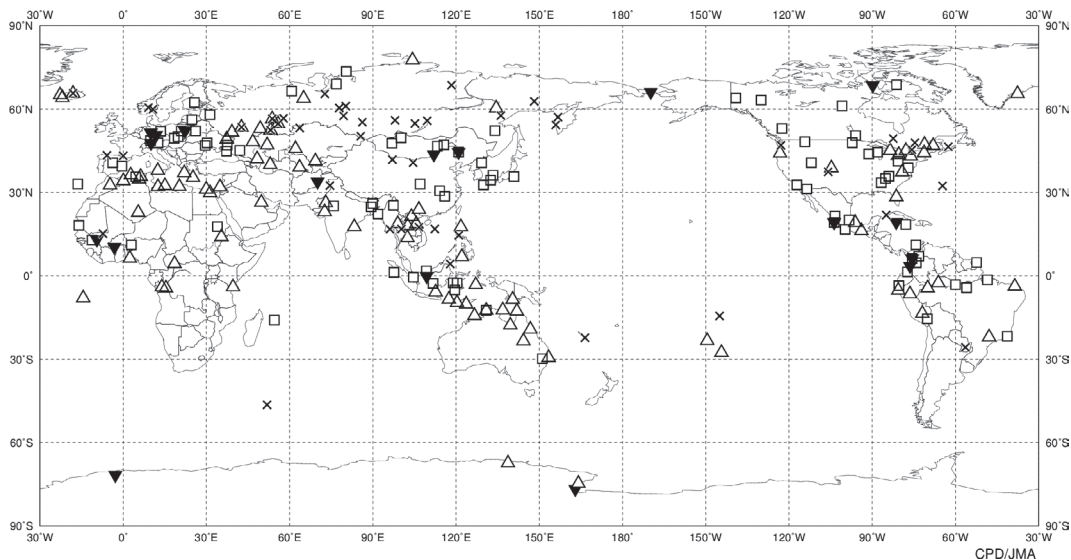


2021年8月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。平年値は1991~2020年の平均値。



2021年8月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。平年値は1991~2020年の平均値。



2021年8月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。